

万富東大寺瓦窯跡の瓦窯と平瓦叩目文様との関係

岡 本 芳 明

— 論 文 要 旨 —

万富東大寺瓦窯跡は、鎌倉時代の東大寺再建瓦を焼成した窯跡として知られる国指定史跡である。この地で焼成された瓦は、東大寺大仏殿のみではなく中門や回廊、南大門、鐘楼にも使用され、多数の瓦窯で30～40万枚が生産されたといわれている。瓦当面には、「東大寺大仏殿」の文字が配され、平瓦の凸面には多種多様の叩目文様があり、一部の瓦には「東大寺」刻印がみられる。

南北に細長い「大寺山」と、その南西の半独立丘陵「上の山」に分かれ、これまでに岡山県教育委員会と瀬戸町教育委員会によって発掘調査と科学探査が行われている。

瓦窯と瓦の叩目文様との関係から、叩目文様の時系列を検討して瓦窯の築造順序を推定した。操業当初は、大寺山地区北側と上の山地区北斜面で瓦窯が築造され、その後、さらに瓦窯を追加、大寺山地区では順に南へ瓦窯が築造されたと考えた。

1. はじめに

万富東大寺瓦窯跡は、岡山県岡山市東区瀬戸町万富に所在し、鎌倉時代の東大寺再建瓦を焼成した窯跡として知られる国指定史跡である。

この地で焼成された瓦は、東大寺の大仏殿のみではなく中門や回廊、南大門、鐘楼にも使用され、30~40万枚の瓦が生産されたといわれている。瓦当面には、「東大寺大仏殿」の文字が配置され、平瓦の凸面には多種多様の叩目文様があり、一部の瓦には「東大寺」の刻印がみられる。

万富東大寺瓦窯跡は、南北に細長い丘陵「大寺山」と、その南西の半独立丘陵「上の山」に分かれている。これまで、昭和五十四（1979）年に岡山県教育委員会（岡本1980）が、平成十三（2001）・十四（2002）年に瀬戸町教育委員会（岡本ほか2003）が発掘調査と科学探査を行っている。南北に連続する14基の瓦窯のほか、管理棟と思われる礎石建物、工房や暗渠排水施設などの瓦

生産に関わる施設が確認されている（図3）。

岡山県教育委員会の調査報告では、各遺構と平瓦の叩目文様などの関係から、叩目文様の時系列を考察している。瀬戸町教育委員会の調査成果とあわせて瓦窯の築造順序を推定してみたい。



図1 東大寺軒丸瓦

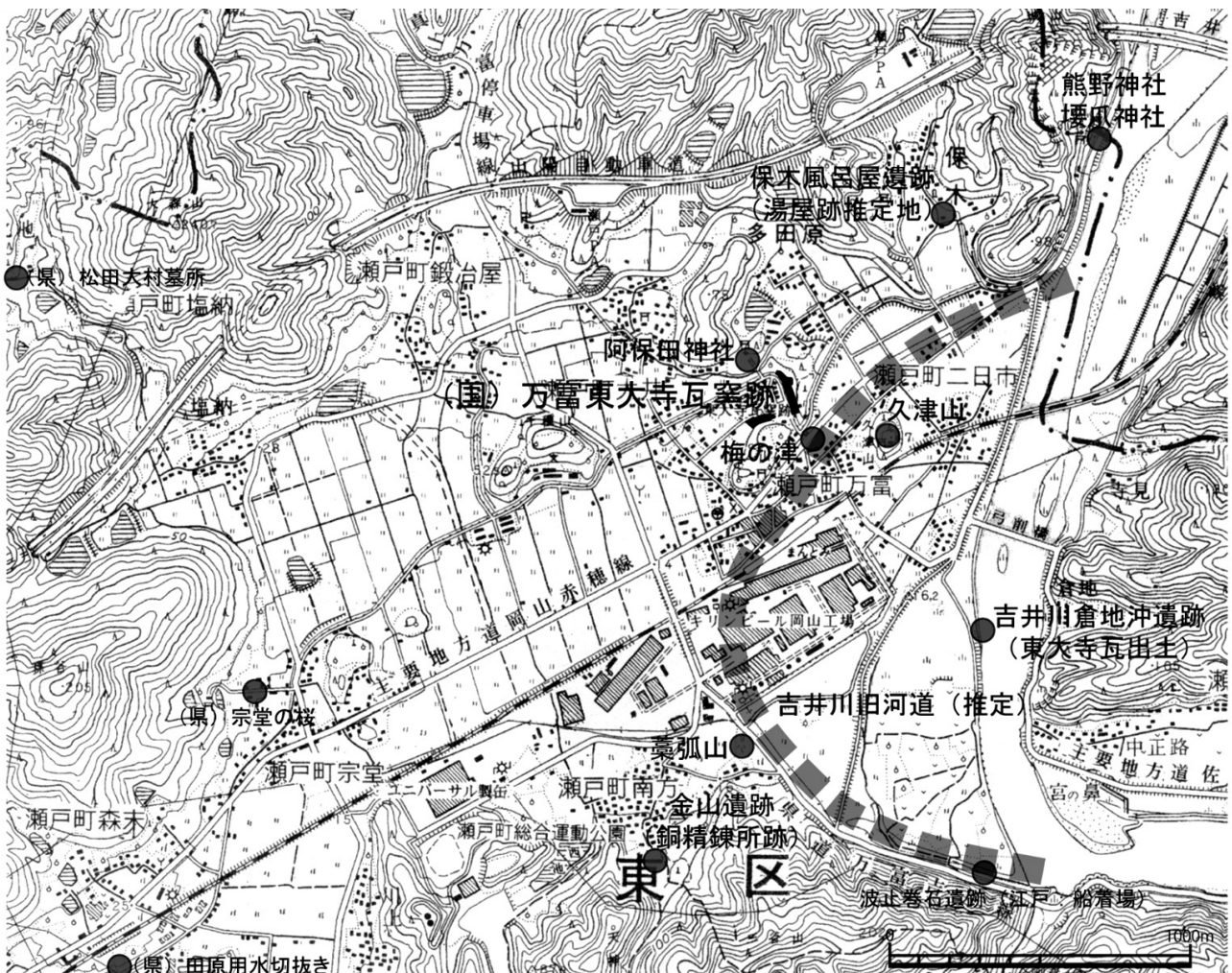


図2 万富東大寺瓦窯跡と周辺遺跡

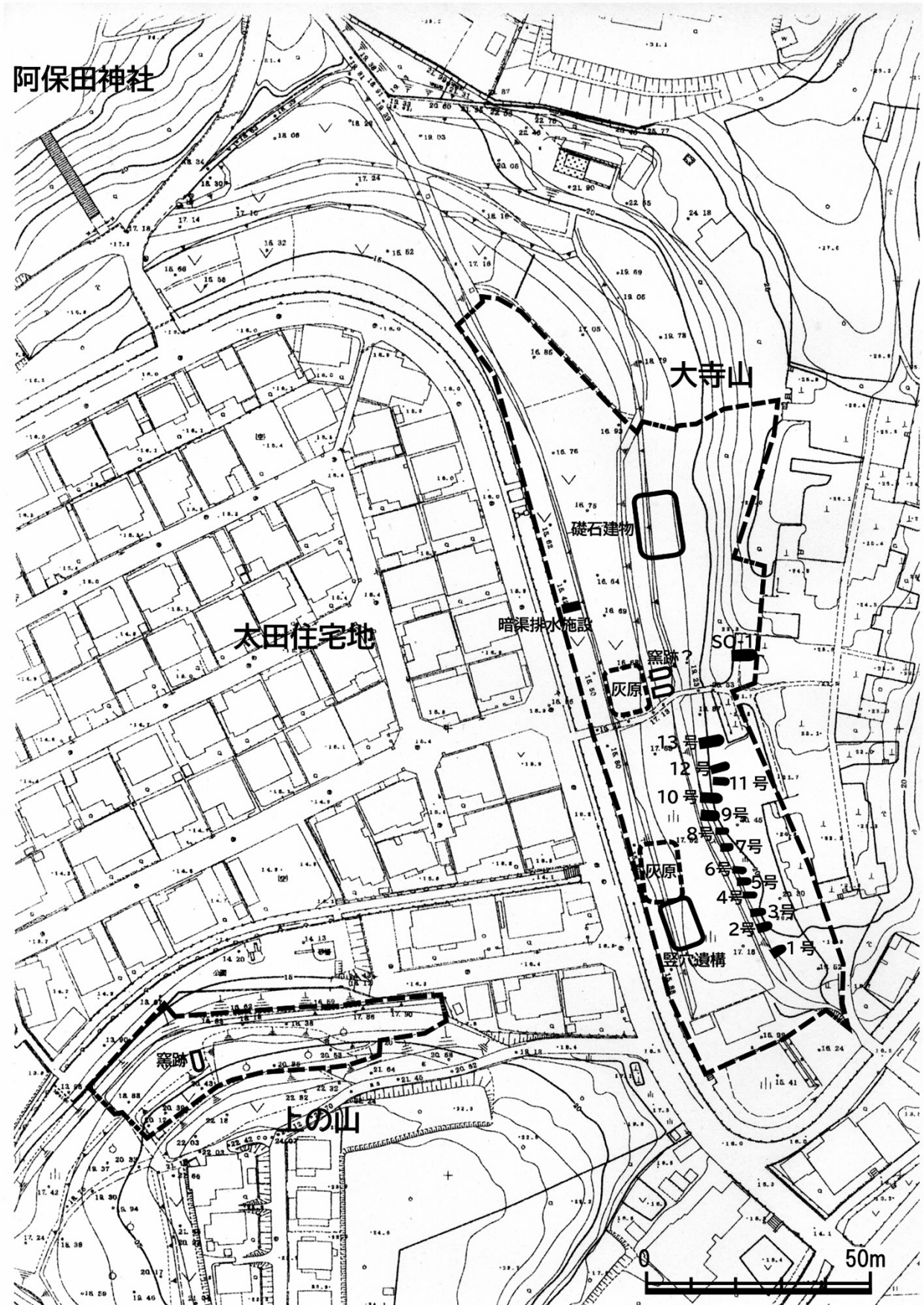


図3 万富東大寺瓦窯跡の遺構配置図

2. 万富産東大寺瓦の平瓦叩目文様

万富産東大寺瓦の平瓦凸面には、叩目文様があり大きく1型から7型に分類される。1型から6型は基本的に格子目文で、7型は縄目文である。さらに、1型は4種、3型は2種、5型は3種に分かれる。5型は、複線の斜格子文であるが、5B-1型は1C型に類似し、5B-2型は複線の波形であり、5型の範疇ではなく別

の文様として考えた方がよさそうであるが、とりあえず5型に含めて報告している(図4)。

この叩目文様は、工人が使用する叩き板の文様であることから、同じ叩目痕跡のある瓦は同一工人(集団)が作成したものと考えられる。使用する叩き板の老朽化により叩き板をかえることが考えられるが、多種多様な叩目文様から工人(集団)の組織構成を推定することが出来る。

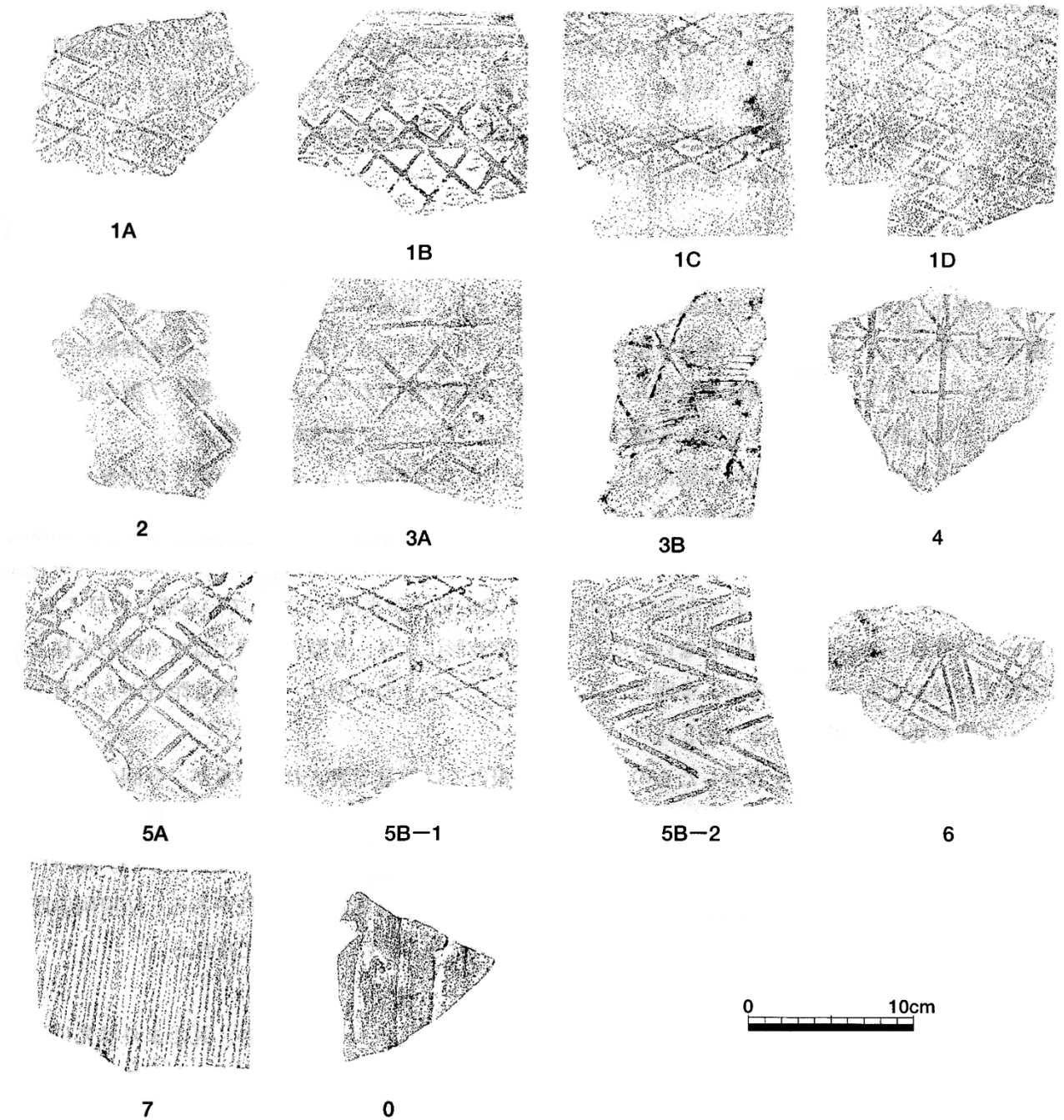


図4 平瓦叩目文様分類図

3. 瓦窯と平瓦叩目文様との関係

(1) 岡山県教育委員会の調査成果

岡山県教育委員会の調査は、保護保存を考える上での基礎的な資料を収集する目的で行われた。対象は指定地の「大寺山」南側で、磁気探査を事前に行って窯跡の位置を推定し、それに基づいて発掘が行われた。瓦窯13基と工房跡と思われる竪穴遺構が確認されている。なお、すべての瓦窯を発掘しているのではなく、発掘されたのは2号窯、3号窯、10号窯、11号窯、12号窯、13号窯で、いずれも分焰牀を持つ半地下式平窯である。

2号窯は、2条の分焰牀に叩目文様1A型と1B型の瓦を使用して、叩目文様6型の瓦を焼成している。3号窯は、分焰牀に叩目文様1A型と3A型の瓦を使用して叩目文様6型の瓦を焼成している。これらから、叩目文様1A型・1B型・3A型は6型より古いとしている。

10号窯は、叩目文様4型の瓦を焼成している。11号窯と12号窯は、分焰牀や擁壁に叩目文様1A型の瓦を使用して、叩目文様4型の瓦を焼成している。これらから、叩目文様1A型は4型より古いとしている。

13号窯は、他の窯と違い分焰牀は4条で大きい。埋土から叩目文様2型と3A型が多数出土しているが、焼成した叩目文様の断定は控えている。

上の山窯は、位置は示されているが発掘はしていないようだ。叩目文様5A型を焼成している。

調査報告者の岡本寛久氏は、各遺構と瓦の叩目文様などの関係に着目して、以下のように万富東大寺瓦窯跡の瓦生産状況を推察している。

叩目文様1型と7型は、瓦の叩目文としてはもっとも普遍的なものであり、各遺構からほぼもれなく出土している。そして、分焰牀に使用されていることから瓦窯跡操業初期に焼成されたものであるとしている。

窯の埋土から出土した瓦や、窯体・分焰牀に使用された瓦から、一つの窯で焼成された瓦の叩目文様はほぼ1種類に限られるようであり、2・3号窯は叩目文様6型、10・11・12号窯は叩目文様4型と共通した瓦を焼成している。さらに、分布状況から2～6号窯と7～12号窯と瓦窯が5・6基のまとまりを持つことから、このまとまりを1単位として、操業に従事する工人達を組織化して掌握したと考えている。

また、竪穴遺構や灰原から出土した瓦の叩目文様、遺構の切り合い関係から、竪穴遺構は2～6号窯に伴い、2～6号窯が7～12号窯より後に構築されたものと推定している。

東大寺瓦のもう一つの特徴として「刻印瓦」がある(図5)。縦約5cm、横約2cmの隅丸長方形で外郭に突線で囲み「東大寺」銘を陽刻している。東大寺鐘楼出土



図5 東大寺刻印瓦

の刻印と比較して、万富産東大寺瓦が東大寺鐘楼に使用されていたことが確実となった。

(2) 瀬戸町教育委員会の調査成果

瀬戸町教育委員会の調査は、遺跡範囲の確認を主目的に大寺山地区の北側と上の山丘陵の北側を対象として行われた。

確認されたのは、瓦窯1基、礎石建物と排水施設、東大寺瓦操業以後の土器窯と瓦列である。すべて大寺山地区で確認された。岡山県報告にある上の山にあるとされる窯跡の確認に努めたが、瓦窯の位置を特定することはできなかった。

SO-1窯は、13号窯の北側に位置し、焚口を含む燃焼室部分約2mを検出している。分焰牀を持つ半地下式平窯であることがわかっている(註1)。

礎石建物は、南東隅しか残存していなかったが、地山面を削って整地した後に礎石を据え、その間にやや小型の石や東大寺瓦片を並べ地覆石として利用している。5間×2～3間の草葺屋根の管理棟であったと推定される。

排水施設は、調査地の最も西で確認された。東西約2mのみの確認であるが、平瓦の上に丸瓦を組み合わせた暗渠としている。東隣の上段に排水を要する施設があったと思われる。

SO-1窯からは、叩目文様3A型・5A型・7型が出土し、隣接する排水溝(報告書ではSK-1・2・3)からは叩目文様3A型・7型が多く出土している。この周辺では叩目文様3A型・7型が焼成されたと考えられる。

科学探査で推測されるSO-1窯の西にある瓦窯の灰原からも、叩目文様3A型・7型が多く出土している。3B型・5型・6型は出土していない。

礎石建物は、地覆石がわりに利用していた瓦をみると、叩目文様3A型がほとんどである。排水施設では、

叩目文様3A・7型が圧倒的に多い。

全体的にみると、大寺山地区(北側)では、叩目文様1B型・3A型・7型が多く出土している。したがって、それらの叩目文様を焼成した瓦窯群が南北二列に位置していたと思われる(岡本2021)。そして、礎石建物や排水施設は、これらの窯に伴うものであると考えられる。上の山地区では、叩目文様1B型・1C型・5A型・5B型が多く出土している。

刻印瓦を叩目文様別に集成すると、同一刻印の中に数種の叩目文様をもつものがみられる。叩目文様1C型・5A型・5B-1型と3A・7型と1D型・3A型の3グループである。

刻印は、事務系官人が工人の仕事量を把握するのに使用する検印であるとする、それぞれのグループは同じ時期のものとも考えることもできる。

4. 調査成果からみた叩目文様の時系列

叩目文様1型・7型は操業初期のものとして、叩目文様3A・5A・7型がともに出土していることから、3A・5A型も比較的古い部類に入るものと思われる。

一つの瓦窯の焼成した瓦と分焰牀使用瓦の関係から、叩目文様1A型・1B型・3A型は6型より古く、1A型は4型より古い。

遺構の分布と切り合い関係から、叩目文様2・3A型は4型・6型より古く、4型は6型より古い。

刻印瓦の叩目文様をみると叩目文様1C型・5A型・5B-1型と3A・7型と1D型・3A型が同じ時期のものと考えられる。

したがって、叩目文様1型・7型、3A型・5A型、5B型、2型、4型、6型の順に新しくなるとされる。ただし、1型は4種あり比較的継続して続くようである。

5. まとめ

瓦窯と瓦の叩目文様との関係から叩目文様の時系列を

検討した。

操業当初は、大寺山地区北側で叩目文様1型と7型を、上の山地区北斜面で叩目文様1型を焼成したと考えられる。その後、大寺山地区では叩目文様3型そして2型を、上の山地区では5型を焼成する窯が追加、さらに大寺山地区では叩目文様4型・6型と順に南へ瓦窯が築造されたと思われる。

令和三(2021)年五月から、万富東大寺瓦窯跡の発掘調査が岡山市教育委員会によって行われている。大寺山の南部分の南北に並ぶ瓦窯の位置が再確認され、改めて大規模な瓦生産地であることを知らしめた。さらなる調査成果に期待したい。

【註】

1) 平成七(1995)年に、この窯のすぐ東で墓地造成が行われ、分焰牀(条数不明)が確認されている。

【図版出典】

- 図1 東大寺軒丸瓦(瀬戸町郷土館蔵)
- 図2 万富東大寺瓦窯跡と周辺遺跡 筆者作成
- 図3 万富東大寺瓦窯跡の遺構配置図 筆者作成
- 図4 平瓦叩目文様分類図(岡本ほか2003より転載)
- 図5 東大寺刻印瓦(瀬戸町郷土館蔵)

【引用・参考文献】

- 上原真人1989「古代の造瓦工房」『古代史復元9 古代の都と村』講談社
- 上原真人2015『瓦・木器・寺院』すいれん舎
- 岡本寛久1980『泉瓦窯跡・万富東大寺瓦窯跡』岡山県教育委員会
- 岡本芳明・西村康・白石純2003『史跡万富東大寺瓦窯跡確認調査報告』瀬戸町教育委員会
- 岡本芳明2021「万富東大寺瓦窯跡の瓦窯の瓦生産数の推定」『岡山市埋蔵文化財センター研究紀要13』岡山市教育委員会
- 森郁夫1994『東大寺の瓦工』臨川書店
- 『東大寺』学生社1999

〒703-8284 岡山市中区網浜834番1
岡山市埋蔵文化財センター】